

ヒマラヤのはと

(1)

ヒマラヤの、山おく だった。

けわしい、山が、空に つきささるように、そびえて いた。

その 山腹の がけの 上を、ぬうようにして、ほそい 道が、うねうねと つづいていた。

その 道を、ひとりの としよりの ぼうさんが、よろめきながら のぼってった。

なにせ 氷りつきそう な さむさだ。

それに 朝から ふりだした雪は、もう かなり つもっていたし、ひるすぎからは、はげしい 嵐 吹くわたり、よこなぐりのふぶき(吹雪)になっていた。

その ためだらうか。

それとも ぼうさんは、ひもしいので あろうか。

病気でもしているのだから だろうか。

まるで は(這)うようにして のぼっていく 足もとは ひよろひよろ していた。

タ、タ、タと よろめいて、今にも がけつづちから、ころげ おちそう な、おぼつかないよう だった。

岩ばかりの むきだしたがけだ。

ころげ おちたら、それっきり 命はあるまい。

(2)

いただき ちかくの 岩かどに とまって、その ようすを じつと みていた、
一羽の はとが いた。

はとは、ぼうさんが、がけつづちで 大きく よろめくのを みると

「あつ、あつない。」

といふなり とびたつた。

とびたつたり、一本の矢より先 はやく ぼうさんの そばへ きて、ころも(衣)の そでを ぐわえて ひっぱった。

「どうしたのですか。」

「さむくて、手足が しびれて、うごかないのです。」

「その 岩かげへ はいって、まっぴいなさいよ。」

はとは そのへんを とびまわり、雪を はねのけて、枯枝をあつめて きた。

そして、石を かちあわせて、火を おこすと、たき火を はじめた。

たき火は、あかあかと ほのお (炎)を あげて、もえあがった。

その 火に、手を かざしながら、としよりの ぼうさんは よわよわしく いった。

「おかげさまで、こごえ死なずに すみません。で もわたしは、やがて、うゑ死に



していくよりほかは ありません。十日間も、なにも たべていませんから。」

「命を たいせつに しなければ いけません。火に あたりながら、しばらく まっててください。」

はとは そういなり、あちこち とびまわって たべものを さがした。

しかし、冬の山には、なにもない。

やがて はとは しよんぽりと もどつてきた。

「どこにも みつかりません。」

(3)

「ありがとう ございました。」

としよの ぼうさんは、心から あたまを さげて、うれしそうに いった。

「わたしは、もう こんな としよりですから、あなたのような、あたたかい心のかたの お世話になって、しずかに 死んでいくことを、なによりの しあわせだと思っています。」

「なにを おっしゃるのです。」

と、はとは しんけんな 顔つきに なって いった。

「わたしは、目のまえて 死んでいく ものを、みごろしには できないのです。」

それから、いいつけるような、きびしいこえで ことばをつづけた。

「いいですか。わたしは ただ そうせずに いられないから、そうするだけの ことですから、かならず いとおりに してくださいよ。わたしは、今から 火のなかへ とびこんで、やきどりに なりますから、それを たべて、あなたは 生きのびて くださいよ。」

と、いなり、はとは もえさかる 火のなかへ ぱっと とびこんだ。

あちというまも なかった。

ぼうさんは おどろいて、はとを 火から ひきだした。

だが、もう まにあわない。

はとは やきどりに なってしまっていた。

ぼうさんは、ぼろぼろ なみだを こぼしながら、いいつけられたとおり その

やきどりを たべて いった。

「けだかいお心を、むだにしないためにいただきます。でも、こんなおいほれを生かすために、たいせつな自分の命をなげだされたあなたは、いったいどなたですか。」

(大智度論)

年 組 番 名前 ()

ヒマラヤのはと

- 1) (1)を読んで下さい。
- 2) (1)には、どんなことが書いてありましたか。簡単にまとめてください。
- 3) (2)を読んで下さい。
- 4) (2)には、どんなことが書いてありましたか。簡単にまとめてください。
- 5) (3)を読んで下さい。
- 6) (3)には、どんなことが書いてありましたか。簡単にまとめてください。
- 7) (3)の最後の文に「おいぼれを」と書いてありますが、「おいぼれ」とは、誰をさしていますか。
- 8) (3)の最後の文に「あなたは、いったいどなたですか。」と書いてありますが、君は、誰だと思いますか。
- 9) 「ヒマラヤのはと」全体を通して読んでみて、この物語は、なにを私たちに訴えようとしていると思いますか。
- 10) 今度は、この物語を自分のこととして、再度、読んでみましょう。自分のこととして読むとは、「自分は、ハト?」「自分は、としよりのおばうさん?」と考えながら読むと言うことです。
- 11) 再度、問います。「おいぼれ」とは、誰だと思いますか。
- 12) 再度、問います。「はととは、誰でしょうか」

年 組 番 名前 ()